男女
壽賀參
上

尾張屋

文番頭と組織の俗名丹
一クセ珍らかなる外百番と称の次第ハシタイ潤り潤すて
シテとは五臺貴の強紙を受口キと云ハ溢水湧出るなき
を云ひサシとも接指潮の満干る等すき成方ときれバ世
中乃人情みな下懸の語を喜ぶものくるる節音多下り
下り無彼陸門乃玉とヨのつヤアハアウレスウイ掛変も老
うたを接ぶる腰の大胴小鼓乃キザミ頭くうたを
横笛乃ほれ楽この意乃道淮乃去就を観世ざるん
すのまん春れ朝より出を生涯ありてハ神宝

生あるものの老若男女頻伽如く其意人も品
多く彫造ひまバ年増あり色増ひれバ山姥を育お角
義八ハ人御宮を造ル形ハ乃逆くと名付きも
可笑ハ庫〻 麻て八表ばかり あがりさがり
あるを見元さるりやうと言指へ形よ三番叟を
踏ませ色女男志乃出ようく水仕
形〻 ぬ

意路ようとも
炬燵乃いあの美
月中〻 戯作

發寸堂閑志述

擬巻中目録歌

綱

いできあるくいくよ
ねぎあ安
美ましき
ひろよ弁と
みと乃
ゆくさび

元服 久ぬくむ花の蒼紙結縛乃
曽我 いろ〻ま刺せるの弐

三井寺

鞍馬天狗

きんぎう

法人を
まず八宝
酒を
呑る中の
酒宴可也

芳年人物画

元服賈我
なほせば
ぢんを
いはぐき
はる
其甲斐あり
く
今ハとちや
娘 おぢさんア、ねろと
まへの耳掻でさんに
ちれこうどう甘うね
いつそこハのやうでうま
しゆうでんひぢ
どきんくするよ
男 おきやがれ
すたいこ
ぢんやらこ
ぢんかい
ぢんをかい
ぢんをかい
ぢんを

女房 アレサ
亭主 エヽいけそうぐしいチット
女房 それでも
亭主 うるやどてあくのすき
女房 ソレさてもまたいくよいくよ
亭主 エヽいてそくだろ紙
チョイと
くしけずく
するなよ
清形
屋でごてぬ
ゆうべ
ふ穂八
わたしゃ
もうあなよ

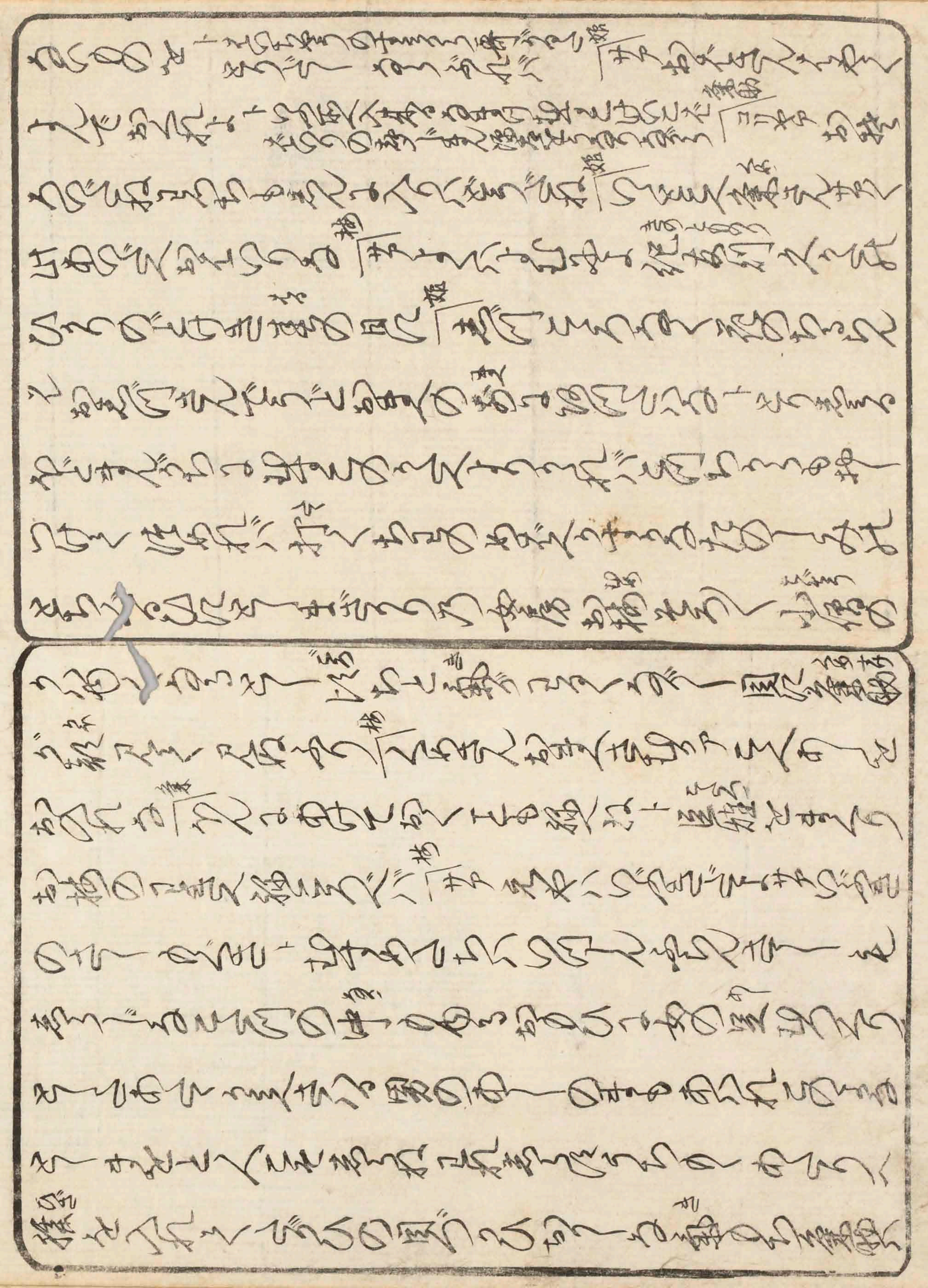
三井寺
客
ウンと
屋根で
ゴロゴロ
ゴロゴロ
ゴロゴロ

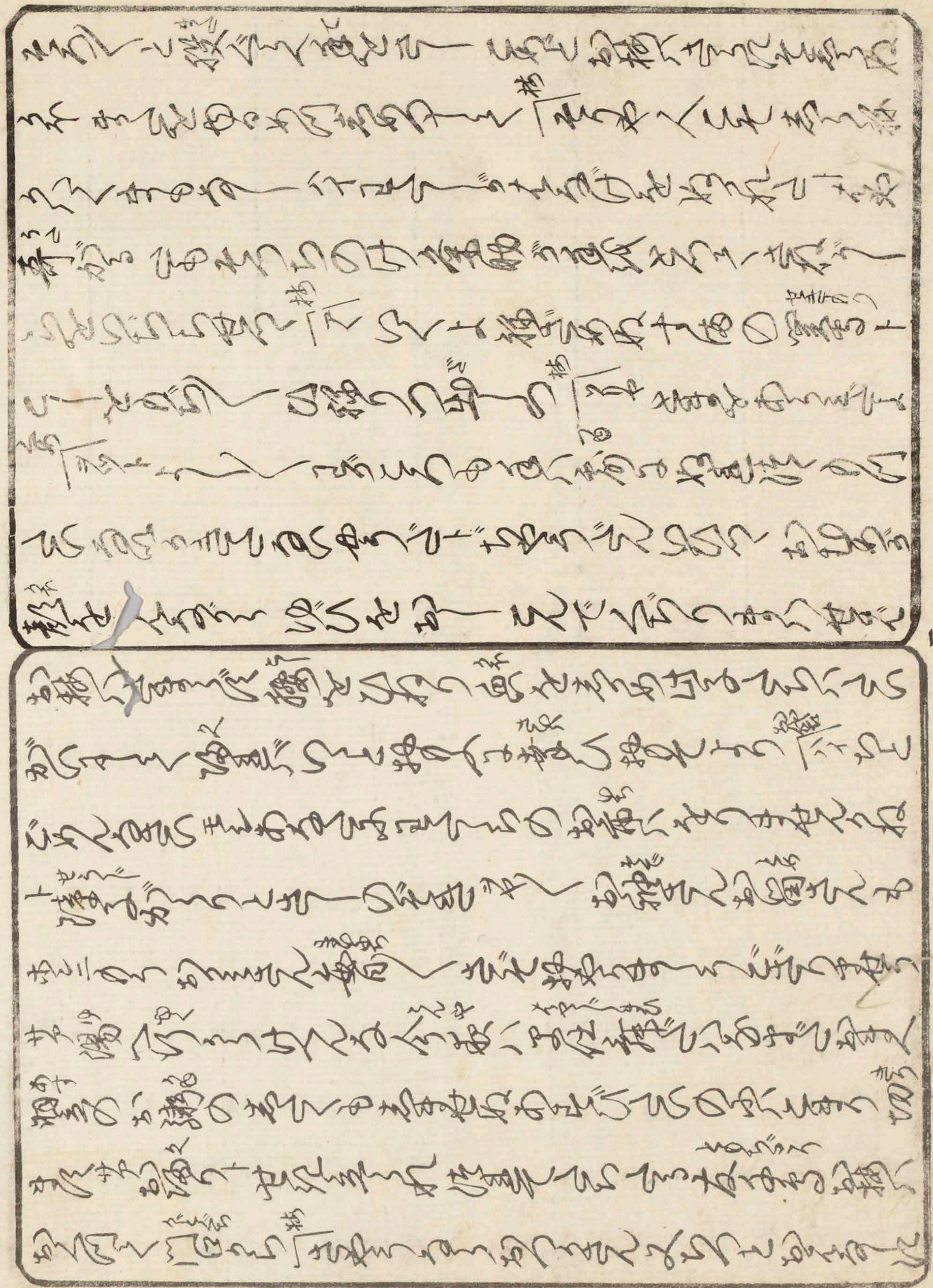
和漢畫圖
画師
アレザ
ごやう
ごぜうでござりまし
ごぜうでござりまし
ごぜうでござりまし

七遍
五郎様
さん上
組
者中
然蛇
拾荷
馬五郎様
色文雄恩
進上
世話人中
酒
壹駄
五郎様
さんぞう
風ふけども
山もぞうぜず
かまくらぶ
ちっとも
動かぬ
男
われがこそ
わんまつすてぞちる
まをとことばやうある
やっそうやア
うんのこつぶ
けんかうえんぞと
きてこうびっくりこうも
する男じやアねへが
人のめつをを
ぬすむのぐらいすこやア
ちっとのさ
かゝ
コウ
鉄さん
けんかうちでこそ
こうゆうこうあく
いきれへ
男
さのきき
まき町でされ金と
ぐ鉄のやらうが
こうちのかこらよ
あつこそうぐ
けんかうはなの
のめにイグ
ゆまうよ
いつこのり
かゝ
そうよ
えんなのいのこ
こうこうこうこ
こうこうこ
今あへけるこう
ちやアれへあへ
こんやアこまんへ
男
ねへそんなかひ
ぎやうなことを
きてからの
こんでも
あるのて
ひとれへ
こんぐ
かゝ
あへ
ぞんの亀
ゆを
にぎる
べこ
やうに
おく
びやう
ぞのう

○戯うら出さ眞倶賢

まもやぎ七種おのうを寄き小形屋の極るばくを
市の玉屋の沖乃梅嘉ちり良もいりしきを玉の毒の
とー酒蔵り お稼ハ巨燈よ貴りきり亭を八年姫の鬼
乃留ちゑ己がとろ氏鬼の角牛の角文字いろけある
合巻の形板を演さーうぐうまぐろむ形うろ形るもま
鶏も実ものきく を西の姫ゞかけく入り 姫 ちまでさんろ八
おきゆーいね弁ゞうこでもいさきうろ トひとりわゞれハ 姫 それ
ちりゑんぞうけくゆ六がよいでハるろ 姫 十二指りーろくも





[illegible]

[illegible]

あねと人とをとをくべ「なに」どうしておらるるのうるさくあり
とやうあがけどろうのうがうぎきにあてはけくいろうぜ「ハ」
きまがはくものうきくべれまもあれても妻くべ四とどうま
「ひ」ようよちげへねへとんどべもぐに薬うにて又うくまうり
ちにうりうれたぐうねたよがりあうまとりてあべ
「ひ」「ひ」が喜ものうよ月もあるまいとのうをげよ
うのぐりあねへさきの寄ぐうをれあげ「モ」あうぎうんはうの
わうのもひでよ「て」うどうにりあるが今ひとべのあうまも
がる「可」すれてをれでるうよ〈〉まををるあきんど「うげる」

上五

男女壽賀多

中

尾張屋

右 [illegible]
道 [illegible]

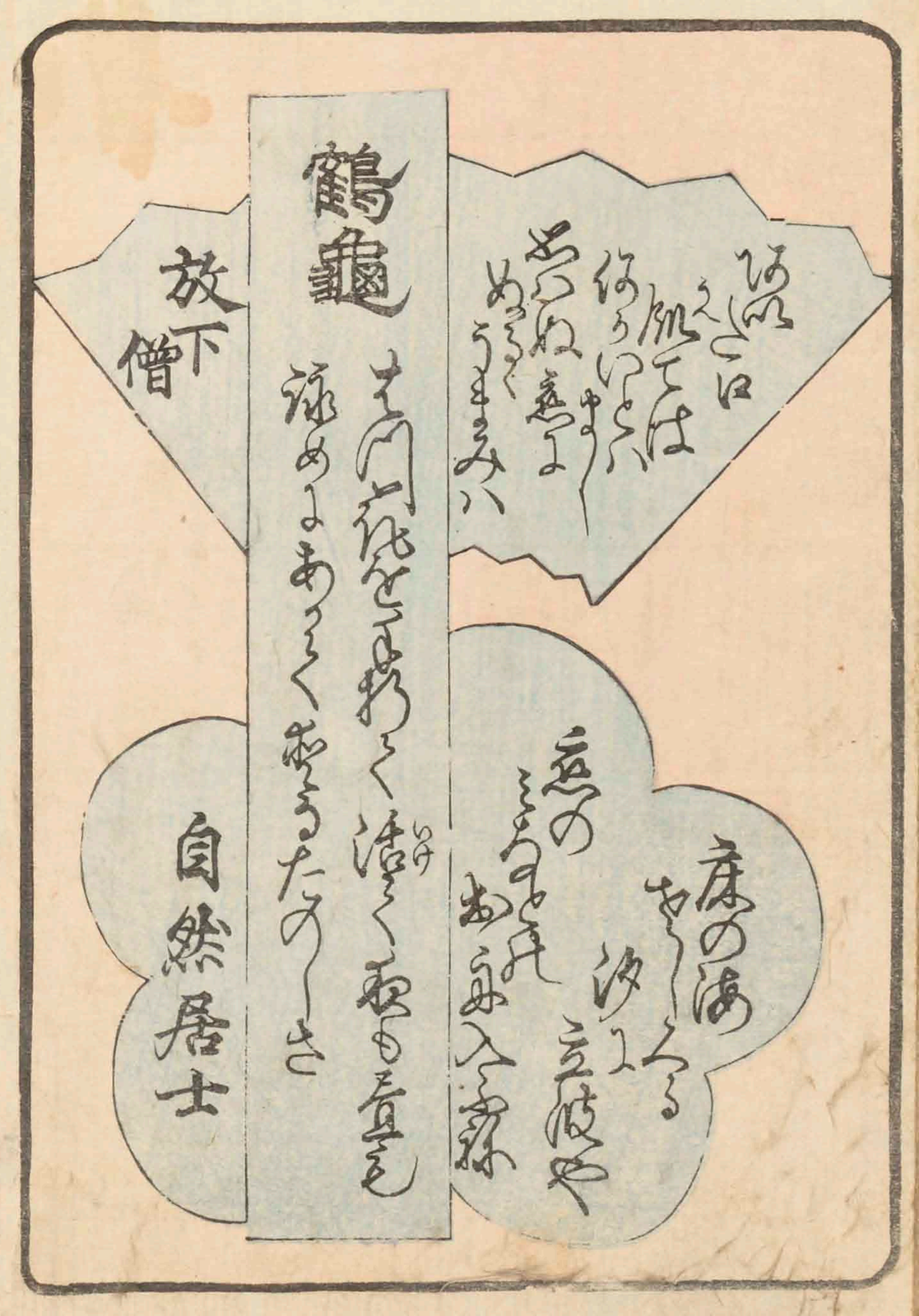
鉢之木

人目も [illegible]
久[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

皿

三味線の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

姥


鶴龜
放下僧
自然居士

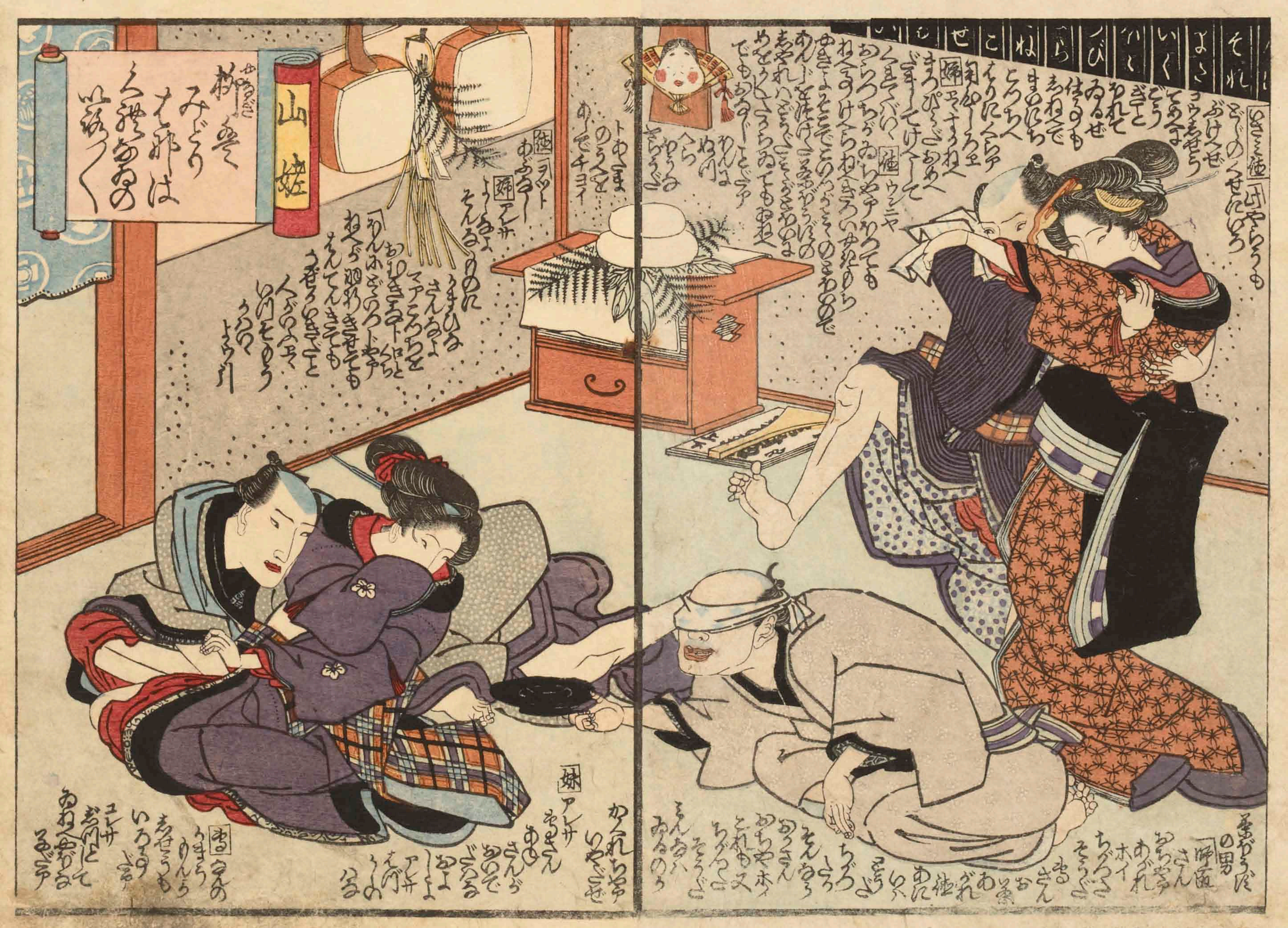
其二

嬢「おとうさのおさねさんハ
ようてとるいぞ〜ぞ

右近

梅ぞ
ちるを
梅ぞ枝の
多らそも
ひとくく
こまの年月

はちの木
ゆきの
の
ふる
ゆきと
うきよ
ふる
雪
みぐるし
雪まぶ
ごりとこそ
とんでもない
人にあろうが
こらぶりわって
まさう
女房
なるほど
ごもっとも
のもの
そんなこと
いまゆへつの
あてまきはるアサさやく
はれてくりやとんでもないことをもうと
ちりのごとそ見ぬのまんをいろくうそを
ばらくてあくをばようれてまくこのご
おらのいくさりようりやとアサ
きりしてりやようくらごきがうら
そうもいつとちゆくいのハごろうアサ
そんなにたらをばくのたろひなきると
ヒとてーごとろくさをれまん女房エゴとく
いよくのうとんるいくるハるのうらの図
図
えんとやせてうやよ
トはとちちヒキャスラく
ちりのごとそ見ぬのまんをいろくうそを
ばらくてあくをばようれてまくこのご
おらのいくさりようりやとアサ
きりしてりやようくらごきがうら
そうもいつとちゆくいのハごろうアサ
そんなにたらをばくのたろひなきると
ヒとてーごとろくさをれまん女房エゴとく
いよくのうとんるいくるハるのうらの図


山姥
柳
みどり
たえは
久枝なの
ゆうく

放下僧

鶴亀
よはをなべて
君乃
めぐみそ
なりける

自然居士

○虚実事

月は雲なく野の宿借るは浅草寺ばかり

ろ形る花の廓乃意の闇うるき籠のさゝ時紙

ハ人もひとるのみる何ぶゝ楼上よ山ぢろ名さて

る扇ばらんわりまぢ実出の初花乃名義ゆる

きゝ昼ようゝ性もふく歩敬さ名ぶり名吉性

そく金豆もるぶゝ見客の見こひ初の客

ふりひとりハ年の頃三十五六あゞたら色傳そ

又ひとりハ町人体世だろうれ優男どうすること

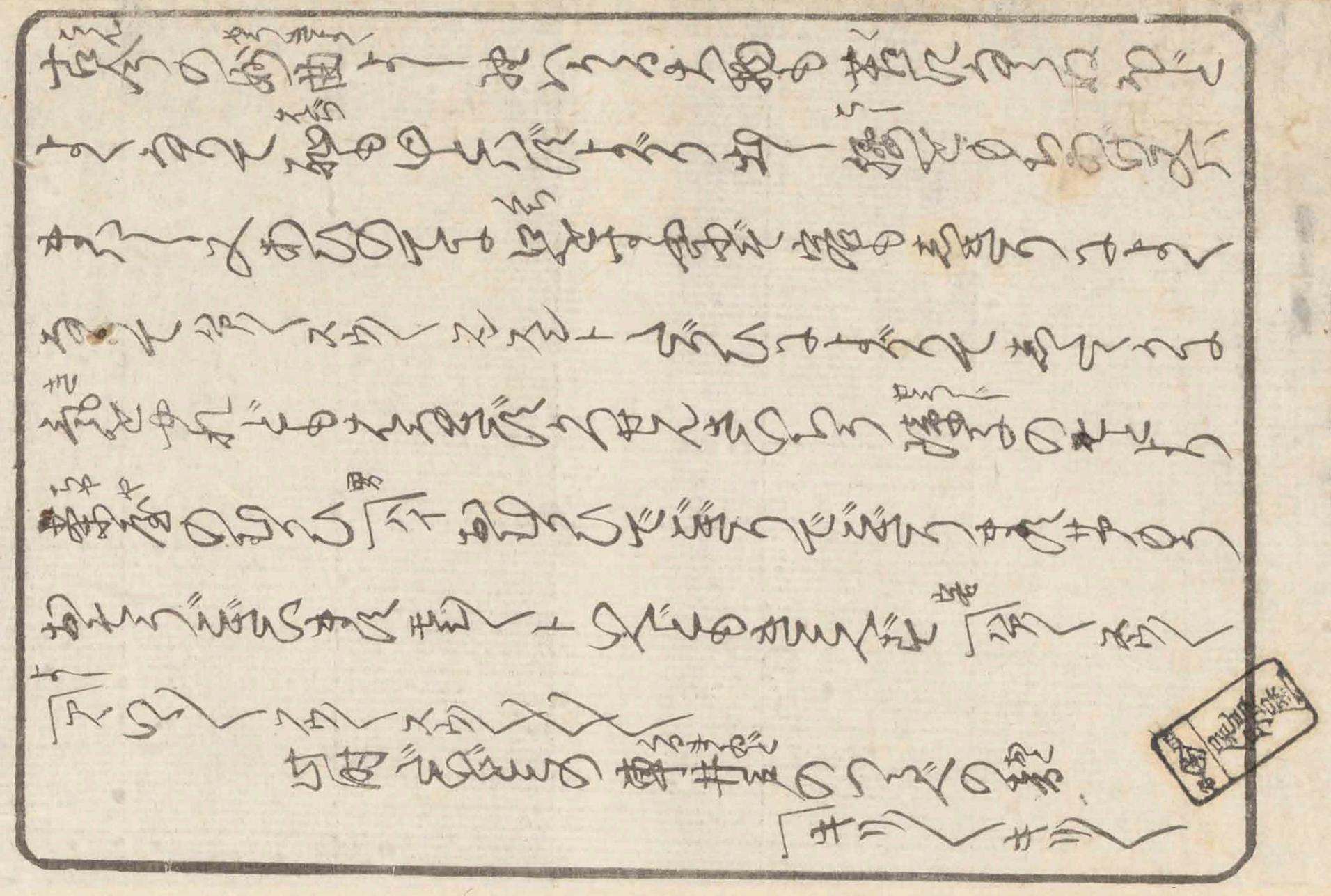
[illegible]

さいきたりうせうくと一抱あのどくるをあてくうも
せびおひらんハのをとりうんとうらんすてうてうくと泣き
ちきりにきぎ〜後をひうびく有りぐるよ一すくく
をとゆりくるるにコハきけうもやきぐ成かぶりのちきた
しろ白玉堂ゆきんとハおのくんども今きたにせんううく
そのまたにゆ〜こませいろくまあせまども屋風長猶
の半房つくく赤ようハへうてうり光ようきうくきにぷり
こぐびおすこハめにらきあのさぐさやこらくうゆく
きをとれバらとぐちらきぎ一抱びり〜とるるびうきぐ

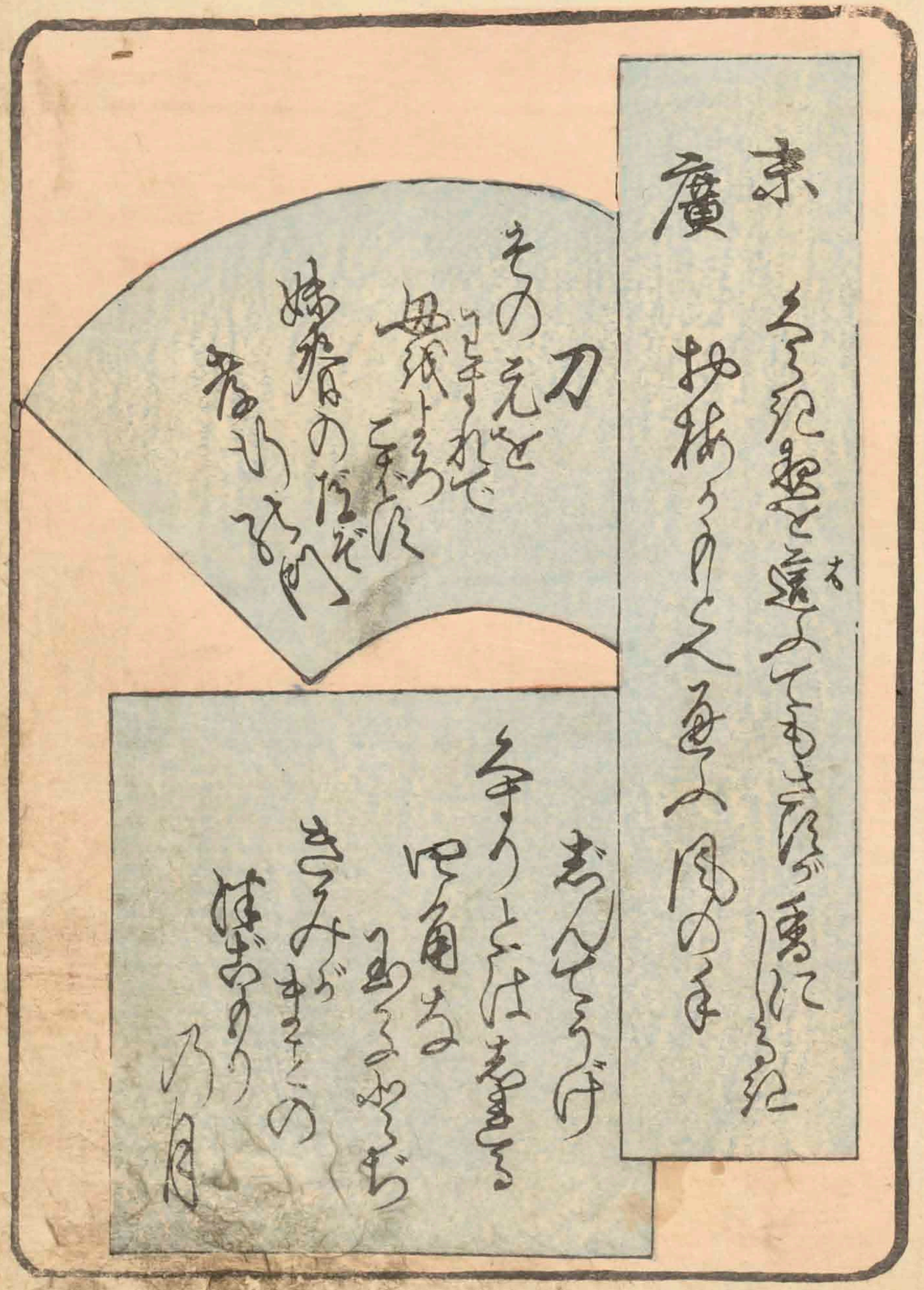
やらうとおのひさあぐくあてやくこたる〜ぎまに
こけれどあきうめくあのてまみおうらよ屏風の
を外より新造の新田ぐあ夢まく一モ地ならんへのイ
ちゆにとお見よかりイせうとりイくアあのらんへ
ア〜ちのよまりとひひ正ヒョウ川トやうそう立て
法の立めぐり上高引けけ出ぐゆく〈これハ今一人の
きりうひ宮せきうの少ぎれをあらせうきたりう
より神八毛水をくくいそぎ彼ぎ〜きくけ有一モシ
祇園〜ちくにをきりうあにヒヤまぎ祇園んせんね

をぢさげく鹿のあとうく「イやまて」とはなだ入
のあてやうるる　下和ガ和とも云るはものるを
君ゆひと数乃ちきけるは百年の寿をも持んと
かるはやいかるんなどくちりとうぞ　彫ずり
をうつて陸門の毛をぞうぞちるとはをすべ
あろうよくはをすはやあうくちりうぞりはくる
宮八のそやよき所と陸門へ二本のやびをさとを
ゆるりくとくだりうまびより　世八宮の一枝を
んとするにおりくとあてる帝代の一枝弓刑の長張

二代目ともいつのべきはきりきるる大王の芝生きて
よ殺ゆびをぞまつねやどのすてきる一枝ゆまるを
入るそのあとあくなもおどろくだりうり時分八よと
りうんでねりやるる陸門の毛をぬくやるるうんで
ねのとまでぐりとひれらまよ世八りうと見ひとの見
見れあるぐアトさひんでうをひねりさるぐぞんぶんま八
うけうて獲をのぢくする西を宮小ぞにそうく
あらひぞくうるひゆるをまちてあるひ八大ぞ
又八きぞこ上ととりうへそぐ秘術とつく



尾張屋



牡丹
花月
上の男
中の男
吉

其二

雄 アレ〳〵あつうきん八ぐらぐらもアレサいやざよく〳〵エそふけいきるアレよう〳〵

八 アとれまづうにまつやまわるるぞゼそはさそんるに大きるこるをそてふまるりんゥコレサをづむ

あさ アレサ若さんよくるこるこぞうせうのうコレサあの鯉みるにそしうどうもこるいるをアレサく〳〵

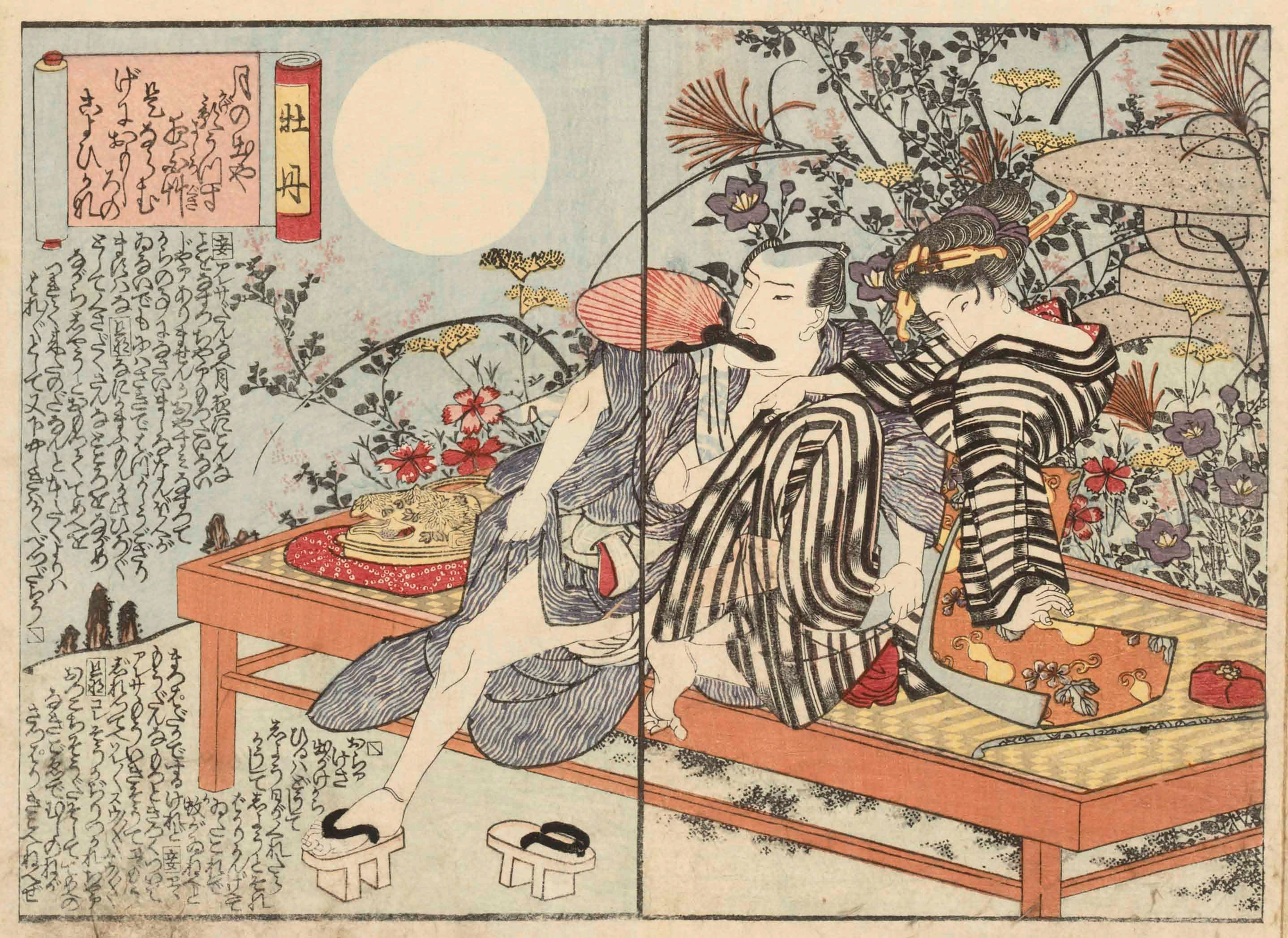
吉 いやでもうこでもうるるちやアのうすりがんとるるでエでかうるるるるねうちやアそるるるねるるもちろんさろうてくんねくうしてるるのハあざやるるるるエとやアねよくいるやりざるるとのへるりんしやアるるりのひざやアうるのりのでらやづけと

いよあるもいろんづくりくりくんねくあつきりそーてまんざうしやアねぜ

末廣

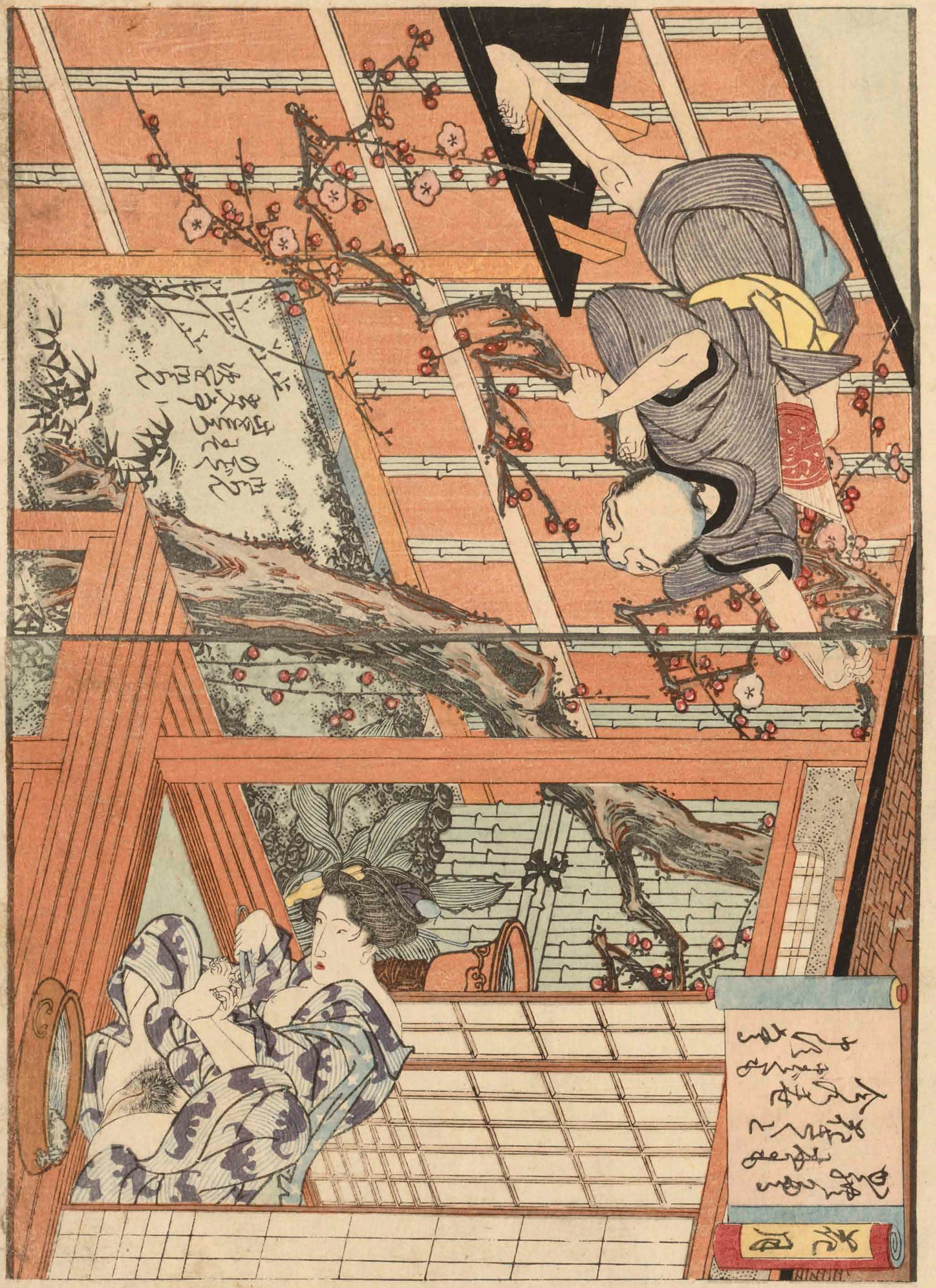
みれ人をなまさけあり扇ろ地紙をりくは

おやまの
ふるさとをば
まれよ
あく
めぐりあひ
ばかりの
はつこい
盃


牡丹
月の出や
新うりの
あをみ竹
見るもむ
げよおりろの
きよひえん

あまのを
このうへでも
人も知れず
まるかくれ
ゆかるる
童齋
女房
男
女
男
男
女

ぎんてうげ
人みは
ちのきとく
ぶり
ぶりや
いり
ゆまでも
㊀
おのらん
男
男



○曷癡うち出ざ舞明

花八撰来人八武士ハいくども人八眉目より出

ゆすて寶おうく如偏執るきを情のあるもま

ぶ藤ふるる屋ハ丞八ぶけこと志ねど実よさる

武士の一撰八侍深二百石後世年の頃四十

ぶり侍仕業の助ちまとのくあり六六河番乃

時の月ていまぎ新より春ぶ妻のお蘭八三十

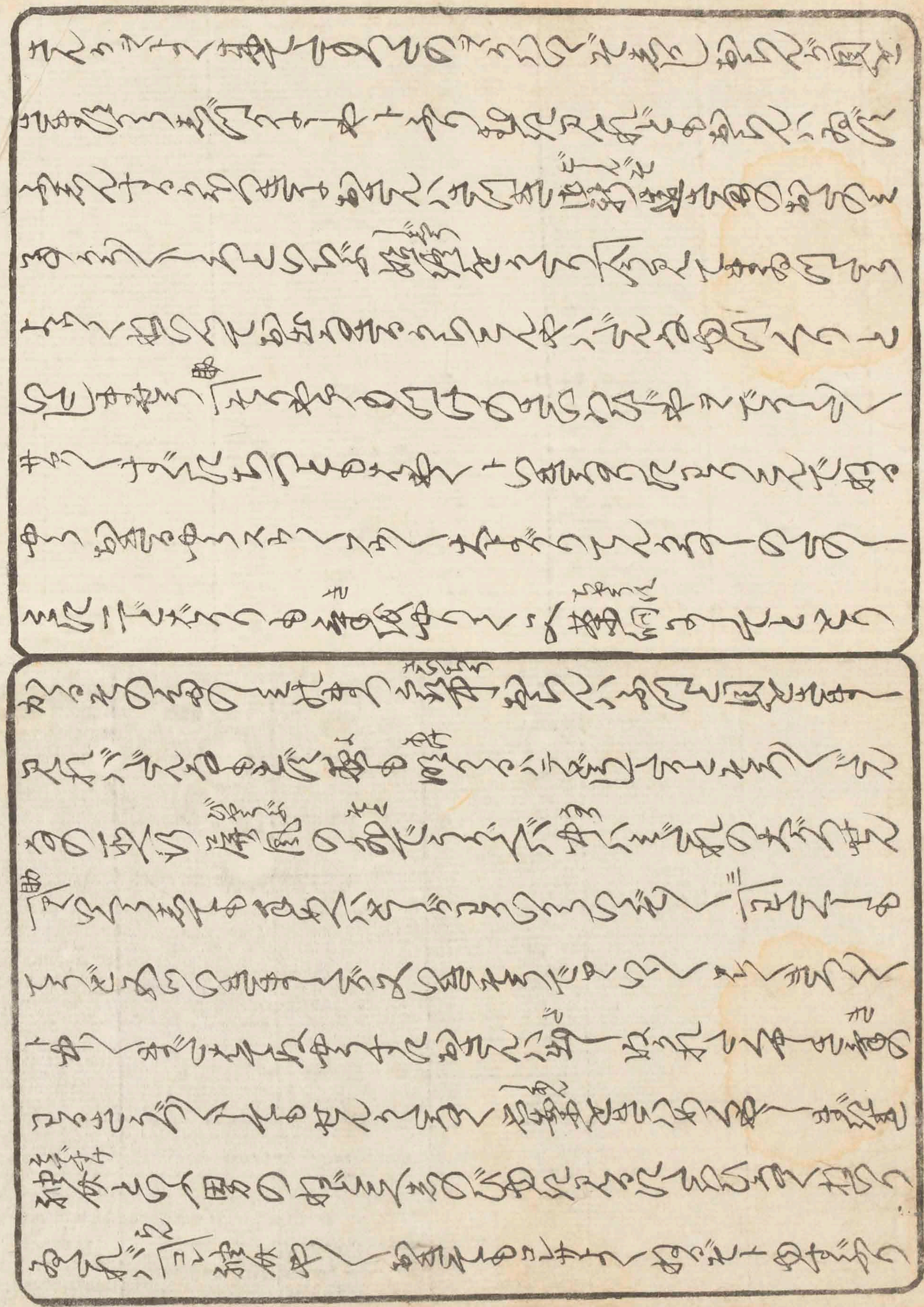
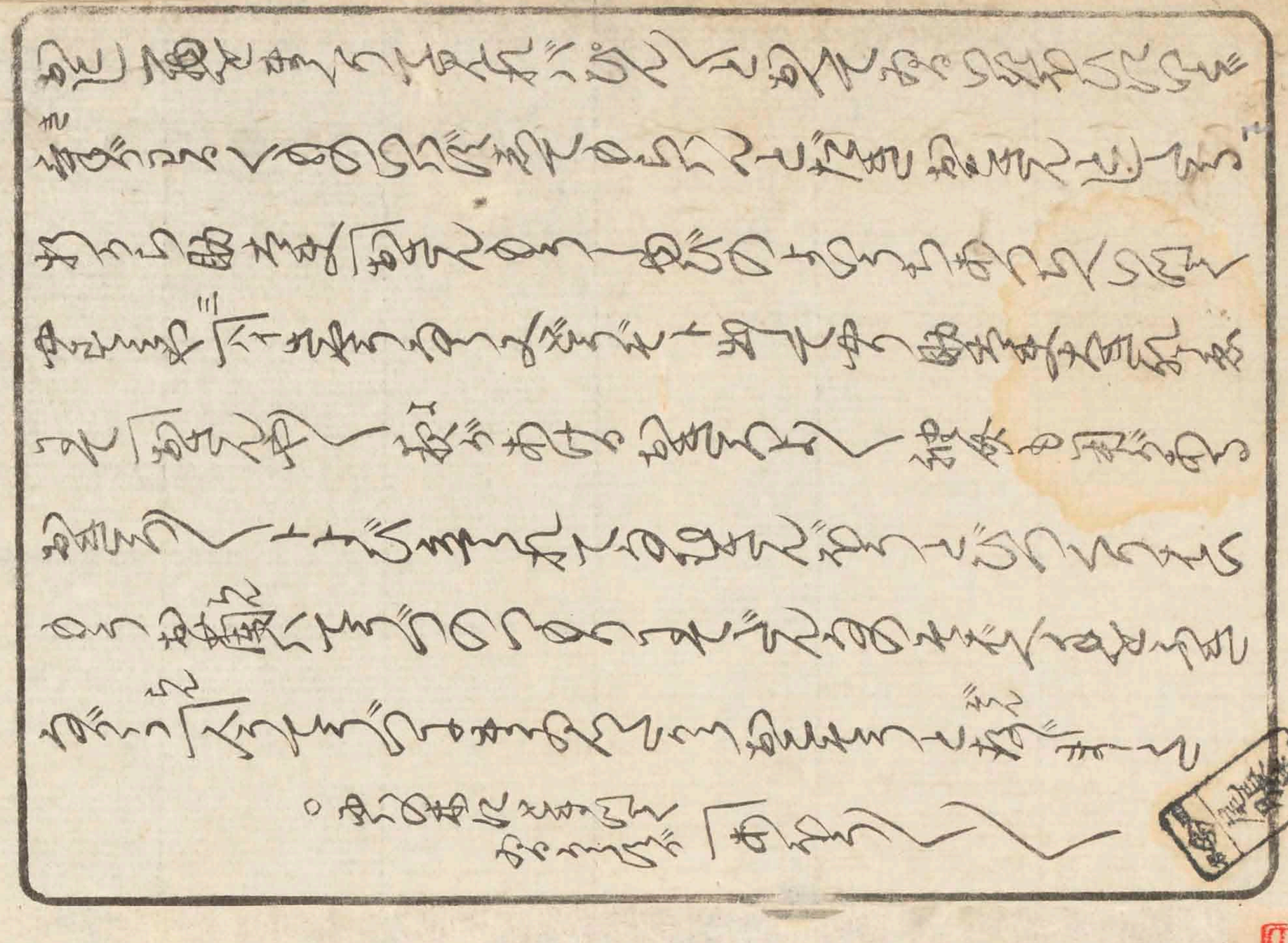
内外ふ仕藤もすくく石体のお三を呼び陸よ

ものひく娶代撰せ「アゝさんやそなさよ

そんるゝまつちのうりの名ふうちちとうとすんでおのくの
あすくへけきやト鑿をむすぐせおきんをはれて次のか
産業のくるるひ周旋するにやら殺到よ及びやあつて
又りとの示くすりうちやふぐきく四方山のまるゝ
しなる芝居をるゝ時を移ふうち鑿もひまひおきふ
産業のうさばけうら又おのまが鑿もわるこくとうり
あげの蘭八ちうけゝ住すのぐるおく雑をるりく
れおれ世帯九世話多くくや永き百も八つさぐり
ゴゼン10度とさぐり繰るあるゝ助ちまを金員をあぐう

繰るゝぞ世房おミも出逃くゝ「ゆるくゝ」まゝ
「今月八おのうゝごぎいまゝくさぐゝ」ゆるゝでおきうゝくらう
助「イやモ居くくの雪ちまくくまりくくそるて「ゆゝ」ぐんるくくふよい
おきがありまくすぐにおひとの石あぐれサやさんやくくや
おゝ鯛をつけや「ミ」自屋のよいくまきうる「ア」さうく
使ふ使利の方ゝやトこれ分奥ゝ小産業でをを見てなな
ぐゝ酒屋して「サ」さんも来て「ニ」のうゝやうとさ
くくハいさできませんトいよまゝ麻ぐさゝひうひやはうり
とうとうゝぐひよよるどのおうる多ひ技鍬モウあるり

とのゝ所へもやれ。おのゝ
ゝけのあ意者傳を見
又に服者を催しける
るゝこおさんゝ座を
すこゝるさるがよゝト次の間へ
とゝやおそゝと座よりゝ
おらんもそこらゝづけく
ゝらもそくねやトいひつさえ
うるぎきくおさんハゝえの
おさんゝ新屋人きのびゝ
さんゝゝ者さゝゝゝゝ
者ね内ゝ酒のゝげんゝ我
おさハきぐふのゝぎゝ
りふりそゝがへやをゝ
これをゝるゝ者ゝゝ助
たゝひゝくねそゝる中
くゝびきゝゝゝんやハ
ト新を見へゝ付れバ

とゝゝ所へもやれ。おのゝ助ゝ者ハ後
ゝけのあ意者傳をゝ
又に服者を催しける
るゝこおさんゝ座を
すこゝるさるがよゝト次の間へ
とゝやおそゝと座よりゝ
おらんもそこらゝづけく
ゝらもそくねやトいひつさえ
うるぎきくおさんハゝえの
おさんゝ新屋人きのびゝ
さんゝゝ者さゝゝゝゝ
者ね内ゝ酒のゝげんゝ我
おさハきぐふのゝぎゝ
りふりそゝがへやをゝ
これをゝるゝ者ゝゝ助
たゝひゝくねそゝる中
くゝびきゝゝゝんやハ
ト新を見へゝ付れバ

ゝ助ゝ者ハ後
ゝけのあ意者傳をゝ
又に服者を催しける
るゝこおさんゝ座を
すこゝるさるがよゝト次の間へ
とゝやおそゝと座よりゝ
おらんもそこらゝづけく
ゝらもそくねやトいひつさえ
うるぎきくおさんハゝえの
おさんゝ新屋人きのびゝ
さんゝゝ者さゝゝゝゝ
者ね内ゝ酒のゝげんゝ我
おさハきぐふのゝぎゝ
りふりそゝがへやをゝ
これをゝるゝ者ゝゝ助
たゝひゝくねそゝる中
くゝびきゝゝゝんやハ
ト新を見へゝ付れバ